

2023

9

令和5年9月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻361号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とまごお

公益財団法人



公益財団法人
さわやか福祉財団



いきがい・助け合い オンラインフェスタ

参加
お申し込み
受付中!

2023

すべての人が幸せに暮らせる社会へ

これまで3回開催した「いきがい・助け合いサミット」の提言とこれからの課題を踏まえ、「いきがいを持って支え合う住民主体の地域共生社会の実現」をさらに進めるため、「いきがい・助け合いオンラインフェスタ 2023」を開催します。ぜひご参加ください!

開催時期: 2023年10月2日(月)~10月16日(月)

開催方法: 完全オンライン配信形式

プログラム: オープニングフォーラム、個別テーマによる「学ぼう編」「語ろう編」、クロージングフォーラム 等

申込受付: 2023年9月24日(日)まで

参加費: 1000円(税込) ※地域活動応援のため、いただいた参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出します。

主な個別テーマ

- ◆ 生活支援コーディネーターや協議体の取り組み方
- ◆ 都道府県の支援、助け合い評価の取り組み方
- ◆ 共生型常設型居場所の広げ方
- ◆ 生活支援(有償ボランティア)や移動支援の広げ方
- ◆ 孤立者への地域支援の取り組み方
- ◆ 認知症の方の社会参加、シニアの社会参加の取り組み方
- ◆ 助け合い活動のケアプランへの取り入れ方

※「学ぼう編」のみのテーマもあります。

オンラインフェスタの詳細は、『さあ、やろう』vol.23

または当財団HP内オンラインフェスタ特設ページをご参照ください。

『さあ、やろう』
vol.23

主な内容

- ◆ いきがい・助け合いオンラインフェスタ特集
- ◆ 「地域助け合い基金」状況ご報告
- ◆ topics 助け合いを広げるために

<オンラインフェスタ特設ページ> <https://festa.sawayakazaidan.or.jp>

<お問合せ> 電話 (03) 3583-1630 (事務局・株式会社インターグループ)

メール festa@sawayakazaidan.or.jp

とあ言おう

2023年9月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

助け合い活動と寄付・遺贈

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

できることでみんなが参加 現役世代による居場所&生活支援

comarch (東京都狛江市)

12 助け合い こんな活動やっています!

助け合いのまちをつくる いつでも誰でも型居場所

ボランティアはなぞの (兵庫県明石市)

16 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

駄菓子屋×子どもの居場所 大学生がつなぐ、子ども・地域・多様性

駄菓子屋 irodori (東京都足立区)

20 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介 / 状況のご報告

24 連載 32 老いの暮らしを創る

トレーニング、開始 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

26 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 13

マイナンバーカード騒動 お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて

30 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー (賛助会員)・ご寄付者の皆様のご紹介

31 活動日記 (抄)

㊗さわやか書棚 / ㊗みんなの広場 / 投稿募集

㊗さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう! 新・ひとりごと・井上 卓朗

助け合い活動と寄付・遺贈

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

近頃は、クラウドファンディングのニュースが頻繁に流れるようになってきた。クラウドファンディングとは、目的や事業を具体的に細かく示して、多くの個人・法人に向けて応援資金を募るといふもの。寄付として非営利の活動を支援するものから、市場ビジネスとして大きなリターンを期待するものまで、ご存じのとおり幅広い。自治体が競い合っているふるさと納税は寄付型のクラウドファンディングだが、これらはインターネットの普及と共に一気に身近なものになった。寄付でいえば、このコロナ禍で、困っている人たちを応援する一つの手法としてさらに広がってきていることを実感する。

それは大変すばらしいのだが、以前ある団体関係者の人がこんなことをつぶやいていた。

「支援が必要なことは地域に山のようにあって、頑張って活動しているけれど資金が足りない。クラウドファンディングを検討してみたが、生活支援の分野は地域の困りごとが細かく当たり前過ぎて、地味で全然目立ちません。日々の小さな支援の継続が実はとても大事なんですけどね」
地域で孤立している人たちや生活に困りごとを抱えている人たちが増えてきて深刻な社会問題となっているが、それを支える住民活動は身近な日常の話がゆえに、特色を打ち出しづらく

なかなか寄付の目を向けてもらえない、ということだ。

「でも、地域の助け合い活動は絶対に必要なものだから、やっぱり身近な呼びかけからだね。少なければ少ないなりにやりますよ」と、明るく表情を変えた笑顔が頼もしかった。

困りごとが身近に感じられれば、共感を生み、寄付支援につながりやすいことは確かだ。日々のちよっとした困りごとを助け合う活動に、その地域の住民の皆さんからの寄付が届けば、お金だけでなくその思いが大きな応援の力になるだろう。

一方で、生活支援の助け合いは、元々地道に寄り添う活動だから目に見える大きな成果を見せづらく、他のイベント的なプログラムに比べて寄付を集めにくい。そこでありがたいのが、これも年々関心が高まっている遺贈寄付だ。遺贈は自分が亡くなった後の寄付だから当然自分への見返りもなく、短期的な成果も求めない。団体の事業全体、その理念や使命に共感して遺贈される場合も多く、この点で生活を支え合う住民活動への支援とは親和性が高いように思う。

当財団に頂戴した遺贈もこうしたお気持ちを寄せていただいたもので、全国の助け合いの地域づくりを支援することができている。お一人お一人の気持ちをできる限り社会に活かせるよう、遺言書の作成から死後事務をどこまで引き受けられるかなど、ご希望があれば細かく相談させていただいている。

9月13日は「国際遺贈寄付の日」。この時期、日本や世界の多くの国々で遺贈の推進と感謝のキャンペーンが行われている。いろいろな参加の形があるように、いろいろな寄付の形がある。参加の働きかけだけではなく、志ある寄付が助け合いの分野でしっかりと地域社会に循環する仕組みの構築がこれからはますます大切となるだろう。まずは身近な助け合いの寄付をぜひ考えてみませんか。



できることでみんなが参加 現役世代による居場所&生活支援

comarch (東京都狛江市)

地域活動に興味があっても、仕事や子育てに追われて参加しづらい現役世代。そんな中、東京都狛江市で、それぞれに本業を持つ現役世代による多世代交流の場と生活支援を2本柱とした活動に取り組む市民グループがあります。その日々を取材するとともに、地域に対する思いを聞きました。

(取材・文／城石 眞紀子)

誰でもどっつぞ！
「まちの縁側、あいてます。」

狛江市西野川の住宅街の一角にある

「野川のえんがわ こまち」(以下、

こまち)は、昭和の空気を感じられる空き家を地域に開放した多世代交流の集いの場で、いつでも誰でもふらりと立ち寄れる「まちの縁側」を目指している。

運営するのは、「狛江(coma)をつなぎ(march)誰もが共に(c)歩む(march)ことのできるまちづくり」をコンセプトとして活動する市民グループ「comarch」。



築45年の空き家を地域に開放

それぞれに本業として自営業や福祉・教育の分野で働く30〜60代のスタッフ7人が中心となり、近隣住民のボランティアとも連携して活動。開所日は、月・水・金曜日と土・日曜日どちらかの週4日。乳幼児から高齢者まで、無料でも気軽に利用できる。それぞれの過ごし方を見守り、適宜交流のきっかけをつくるとともに、必要に応じて相談に乗って有用な支援につなげる

ほか、有償ボランティアとして在宅の生活支援も行っている。

「学生時代に、年齢や障がいの有無にかかわらず、誰でもがひとつ屋根の下で一緒に過ごす小規模多機能の共生型デバイスに関心を持ち、この取り組みの草分け的事業所がある富山に通って見学

や研修も受けました。そして、自分の地元でもいつかこういうことをやりたいと思っていたところ、たまたま親戚の家が空き家になっていることが分かりまして。仲間に呼びかけ、共感してくれた人たちと一緒に2019年3月にcomarchを結成。家財の整理や耐震補強工事を施した上で、翌年6月に『こまち』をオープンしました」

こう語るのは、発起人で社会福祉士

・介護福祉士でもある代表理事の梶川朋さん（35歳）。自称「人見知りの人好き」で、周りを包み込むような優しい雰囲気を持ち主。子どもも大人も誰もが彼を「ともくん」と呼び、皆から慕われているのが分かる。

「こまちは、コロナ禍の最中にひっそりオープンしましたが、口コミで利用者が増えていき、活動3年目を迎えた昨年度は203日間の開所日を重ね、1日20〜30人、延べ3813名の方が参加してくれました」

さまざまな世代が立ち寄り 思い思いの時間を過ごす

取材に訪れたのは夏休み中というところもあり、午前中から10人ほどの小学生が来ていて、1階のリビングでカードゲームをしたり、タブレットやスマホでゲームをしながら、思い思いに過ごしている。ここでは、学校も学年も、

学校に行っていようといまいと関係なし。元気をもてあました子がスタッフと一緒に近所の公園へ行き、鬼ごっこや野球をして遊ぶこともしばしばだ。続き間の和室では、60代の女性たちが女子会中。ここで知り合い、気が合っつときどきおしゃべりを楽しんでるそうだ。「病気になるって仕事も辞め



集いの場の様子

て、ふと気づいたら行くところがなかったんです。だから、近所にこういう場所があるのはすごくありがたい。若い人や子どもと接していると、気持ちも若返りますしね」と話してくれた人もいた。毎週水曜日のお昼は「こまち食堂」を開催していて、「NPO法人フード



たくさんのおもちゃやベビーベッドは地域住民から譲られたもの

バンク粕江」の食品提供も受けながら、大人200円、子ども（大学生世代まで）無料で昼食を提供。この日は、中学3年女子2人が夏休みのボランティアで調理をお手伝い。前出の女子会メンバーの一人は「人手が足りないときは調理を手伝うんだけど、今日はお出番なしね」と優しい眼差しで見守る。



こまち食堂の常連親子



中学生ボランティアが昼食作りをお手伝い

こまち食堂の
手作り昼食

今日のメニュー
♡ 肉じゃが
♡ トマトとサラダ、まよりの
おしそ梅あえ
♡ 赤しそ寒天
(去年のこまちファーム)
☆ じゃがいもは差し入れ
で本日料理は
えんせいあひせつ
中学3年生の
アシスタント
りおさんと あやさんです。

食べさせることができるし、子どもたちが地域の人と交流できるのもいいところ。

昼時になると、近所の高齢者がお昼を食べにやってきた。こまち食堂の常連という4歳と1歳の子どもを連れたパパさんは、「IT関係の仕事を自分でやっていますが、妻にたまには少しラクをしてもらいたくて、仕事の合間を見計らってお昼の時間に子どもたちを連れ出しています。ここに来れば、栄養のしっかりしたごはんを

私自身は、こまちで行っている学習支援のサポートのボランティアもしています。いつも利用させていただいている恩返しです」とさわやかな笑顔を見せる。

互いの存在をそっと感じ合う中で
気づきや癒しが生まれる

夕方5時から「中高生・若者タイム」。

「小さい子がいるとどうしてもそちらに合わせてしまうので、月に2〜3回、10代・20代に限定して閉所後の時間を開放しています」（梶川さん）

真っ先にやってきたのは、中学2年男子のN君。こまちを利用し始めたときは不登校だったが、中学に入ってから学校に通うようになり、現在は野球部で活躍。「ここに来たことでいろんな人と話せる自信もつき、今は毎日楽しい」と真っ黒に日焼けした顔で語

る。こまちでは不登校の子どもを日常的に受け入れていて、一定の期間を経たて登校を再開した子も少なくない。

高校1年男子のT君は、小学生を引



スタッフの皆さん。左から大畑さん、梶川さん、石川さん

率して遠足に連れていったり、出張図書室「まちかど図書室」のイベント企画を持ち込んだり、チャリティ映画祭を主催するなど、ボランティアにも熱心な頼もしい存在だ。

このように、自身の居場所半分、乳幼児や小学生の見守り、調理や掃除などのボランティア半分という形で、利用者とボランティアの明確な境がなく、さまざまな立場で参加できるのが、こまちの特長だ。

スタッフにも話を聞いてみた。

「日々、楽しいですよ。毎日、開けてみないと誰が来るか分からないし、どんな展開になるかも分からない。いろんな人同士がつながることで、思いもしないような化学反応も起こる、そのワクワク感がたまらないんです」というのは、放課後等デイサービスの職員をしていた保育士の大畑恵美子さん（62歳）。仙台との2拠点生活を送る

保育士の石川歩さん（31歳）は、「こまちは、世間でいう生産性とか役割とかを1回外して関われる場所。『何か為さなければならぬ』というものから解放されたときに出てくる、その人自身」というものに、すごく面白さや可能性を感じています」と話し、自身も少なからず影響を受けて「自分探しの真つ最中」と打ち明けてくれた。

そして梶川さんは、「さまざまな人が過ごすこまちでは、その場を共にするそれぞれが、お互いに干渉し合わずともそつと存在を感じ合うという時間が流れています。そのゆるやかで、けれども他者の確かな気配を感じ合う時間が、多世代が共に過ごす場の大切な空気感だと考えています」と語る。

ひととき羽を休めて、ゆるやかにつながり合う。そして、そこで得られる気づきや癒しを実感できることが、こまちの持つ魅力なのだろう。

生活支援で公的制度の隙間の 困りごとを埋める

comarchのもう一つの事業の柱が、通称「こまちア」と呼んでいる、15分につき利用料300円の有償ボランティアによる訪問型の支え合いサービスだ。

「子育て中の方から高齢の方まで、日常のちょっとした困りごとをお手伝いします。市のファミリーサポート制度を利用したお子さんのお預かりや送迎にも対応しています」（梶川さん）

昨年度の利用実績は570件。最も依頼が多いのは掃除で、約半数を占める。いわゆる「ごみ屋敷」に近い状態で、掃除以前に室内の片付けのために継続的に入っているケースもある。そのほかでは、買い物代行、庭の草取りや草花の手入れ、電球・蛍光灯交換、入浴介助、外出同行など。

「制度の隙間になる困りごとが多く、地域包括支援センターとも連携していません。個人からの依頼のほか、高齢化が進む近くの団地では、これまで自治会で担ってきたことができなくなったと、団地内の街路灯の交換や公園の草取りなどの依頼もありました。こうした課題に住民だけで取り組めなくなつたとき、それを誰がどのように支えるのかというところが、大きな課題になっていくのを感じます」（梶川さん）

支え手の核

となるのは梶川さんと石川さん、それから、こまちア専属で関わるスタッフの松山朋子さん（52歳）。松山さんは元ケアマネジャーで、今は近くの狛江ハイタウン（大型マンション）内の1階にある、実家の生花店「ブリーズウ



（上）こまちの“出先機関”的存在の「ブリーズウェイ」
（下）写真中央が松山さん

エイ」を継いでいるという異色の経歴。ハイタウン内で月1回、「シルバーよろず相談」を行っているほか、店を訪れる人の相談にも日常的に乗っている。

「ケアマネをやっていると、介護保険でもそれ以外の民間サービスでも当てるまらないようなニーズがあったので、その隙間を埋める生活支援が必要だと思っていました。それで、こまちという母体があったら活動できると思い、スタッフとして参加。店が忙しくない時間帯を使いながら、困っている人の生活支援を行っています。よろず相談もそうですが、店先での世間話から困りごとをキャッチして、大事に至らないうちに相談を受けて対応できれば、それが一番いい。必要であれば、包括につないだりもしています」

みんなで応援し合うまちを

代表理事 梶川 朋さん



中学生時代に不登校を経験したり、自宅で父母を看取った私にとって、学校や仕事に行っていないくても、病気や障がいを抱えていても、誰もが支え合いながら、自分らしく生きていくにはどうしたらいいのだろうかということは、人生の大きなテーマです。

そんな中で、人と人とのゆるやかなつながりをつくり、子どもたちの育ちも、高齢の方の暮らしも、みんなで応援し合うきっかけの場になればとの思いから、こまちをオープンしました。

もちろん、こまちという1つの場で何もかもできるとは考えていません。むしろ狛江の中に、そしてそれぞれのまちに、小さくても多様な居場所が豊かに満ちることが大切です。それだけに、こまちで出会った小学生のお子さんがあるお母さん同士が、「自分たちもこういう場所をつくりたい」と地域福祉センターを借りて「はちみつルーム」という誰でも来られる場を立ち上げたことは、これまでで一番うれしいことでもありました。

住み慣れたこのまちで、多くの人とのご縁を育みながら、どんな人にも地域の中に居場所と活躍の場があるまちを目指して、皆さんと共に歩いていけたらと思います。

現役世代も地域活動を。現状に甘んじない人が社会を変える力に

ほかにもさまざま企画や交流事業、相談事業など、幅広い取り組みを行う

ている comarch。その行動力と実行力にはただただ感服するばかりだが、本業との兼ね合いは？ また、運営費はどのように捻出しているのだろうか。

「そこが実は課題です。スタッフ7人のうち、3人はフルタイムで仕事をしているので、活動は土日中心。松山さんを除く残る3人でこまちを実質運営しています。専属は大畑さんだけ。石川さんはほかの活動と兼務、私は活動が休みの日にパートタイムで訪問介護の仕事をしていて、この3人は有給スタッフです。活動を継続するには完全に無償では難しく、立ち上げのときの1時間あたり300円から始まり、今年度は同1000円。ささやかな額ですが、自分の仕事と有償ボランティアを両立させることで、現役世代でも地域活動はできる。comarchの活動を通して、そういう生き方を示していけたらとも思っています」と梶川さん。

運営費は、立ち上げ時には当財団の「地域助け合い基金」も活用。現在は、市の委託事業と、支え合いサービス

はじめとするいくつかの自主事業に加えて、たくさんの人からの寄付もあり、昨年度の寄付金総額は約80万円。これは活動への地域住民の共感の表れとも言えるだろう。

「現状に甘んじない人が世の中を変えていく。私と他のスタッフとは親子ほどの年齢差がありますが、彼らを見てみると、日本の未来も捨てたもんじゃないと。この地域活動を10年、20年と続けたら、どんな未来が開けるのか、そこへの期待感も大きい」と大畑さんはいみじくも言うが、まったく同感だ。働く人ももともと柔軟に地域活動に参加でき、誰もが普通に支え合える社会への転換を、私たちも共に目指していきたい。

comarch

多様な居場所と活躍の機会に満ち、誰もが支え合いながら自分らしく生きることのできる地域共生社会の実現を目指して活動。主な事業内容は、①まちのえんがわ事業（「野川のえんがわ こまち」の運営）、②支え合いサービス事業（住民の支え合いによる在宅生活支援サービス「こまちア」）、③まち育て事業（地域を育むネットワークづくりなど）の3つ。①は利用無料、②は利用料300円/15分の有償ボランティア（担い手への謝金は250円で、50円は運営費としてプール）。活動日時は月・水・金曜日と第1・3・5土曜日、第2・4日曜日の10時～17時（土日祝日は16時まで）。

- 連絡先／〒201-0001 東京都狛江市西野川2-31-1
- 電話 03-5761-4102（開所日のみ）
- ホームページ／<https://nogawa.comarch.tokyo>



助け合いのまちをつくる いつでも誰でも型居場所

ボランティアはなぞの（兵庫県明石市）

「地域支え合いの家 西明石サポーターティングファミリー」は、新幹線も停車する西明石駅近くの花園小学校校区の商店街にあります。ここで、誰も一人ぼっちにさせないために活動する「ボランティアはなぞの」を取材しました。

（取材・文／塩瀬 潔泉）

みんなとつながるために

「ボランティアはなぞの」では、平日10～16時まで「地域支え合いの家」を開け、いつでも誰でも型の居場所を運営。子ども食堂、親子を主な対象とする「サポーターティングランチ」、すべての地域住民が対象の「みんな食堂」は、それぞれ月1回開催している。ほかに、居場所の立ち上げ等を学ぶ

「命塾」、一人暮らし高齢者の交流の場「わんサポクラブ」や、専門職による相談会、また、日常の困りごとを助ける「ヘルパータレント事業」で生活支援も実施している。

「私たちは、地域の専門職だと思つて活動しています。目指しているのは、みんなが元気に過ごせること。場合によって介護や医療の専門職につながるきっかけのためにやっています。で



「あったか訪問」の様子。健康状態に変化はないか、困っていることはないか。気づいたことは「はなぞの」で共有し、必要があれば専門職につなぐ

「地域支え合いの家 西明石サポーターティングファミリー」の外観



すから私たちはみんな、食堂のときにお料理だけ手伝うというような参加の仕方ではなく、子どもたちの毎日の下校見守りや、気になる方への『あつたか訪問』なども担っています」と、「はなぞの」代表の松本茂子さん（81歳）。

☆／☆☆ 誰でもOK「みんな食堂」

7月の日曜日、「みんな食堂」を訪ねてみた。

70代のAさん夫妻が食事をしている。Aさんは週3回人工透析に通っているが、それが終わるとデイサービスから帰ってくる奥さんと一緒に、よくここを訪れる。居場所として2人でのんびり過ごし、月1回開催



みんな食堂の様子

される「健康介護の広場」などに参加して、地域の人たちと交流しながら健康・介護・生活などについて学んだりするのも、数年前から認知症になった奥さんをつきつきりで介護する中での息抜きとなっている。

「この皆さんは、妻を本当によく見守ってくださって。少し前に、妻がやせてきたと思ったら十二指腸潰瘍だったんです。かなり危ない状態だったのを、松本さんが自宅まで来て入院できるように手配してくれたんですわ。助かりました」と笑顔で奥さんを見つめるAさん。奥さんは、今は元氣を取り戻し、提供された食事をモリモリと食べていた。

「デイサービスで『帰りたい、帰りたい』と職員を困らせることがあるようですが、帰りたいのは

こんなんで話すのは、在宅介護支援センターの元職員で「はなぞの」と活動を共にしてきた永坂美晴さん。

食堂には親子連れもたくさん来てにぎやかだ。小学校で配布されたチラシを見て来たり、子どもが小さいときに別の場所で行われている子育て広場で「はなぞの」のボランティアメンバーと顔見知りになり、「おいで」と誘われて来たりと、きっかけはさまざま。同じ小学校の2年生という親子もお母さんたちは、お互いに学校のことを聞けたりするのも安心だと話す。

「もし親の急用などで家に入れないと



松本さん（左）と永坂さん（右）

か、そんなときはここへ来るように子どもに言っています。何かあったときに「よその頼れる人」がいるのは安心」と話すお母さんもいた。幼稚園ママのサークルも、近々ここを拠点として活動することが決まったそうだ。また、この日は会えなかったが、精神障がいを抱える妻と、発達障がいの子を含む3人の子を連れてこの食堂に来るお父さんもいる。

「ここ以外にお父さんが息抜きできる場はないのでは、と思います。最近はお母さんの表情も変わってきました」と松本さん。

子どもたちにはさまざまな人と出会い、役割を担って、他人への思いやりが持てるようになってほしいと、コロナの感染が広がるまでは食後の雑巾がけなどをやってもらっていたそうだ。

☆ワイワイがやがや

みんな食堂できびきびと動き回り、

料理や配膳を担っていたのは地元的女性たち10人。最高齢者は85歳。昔、松本さんとPTAや自治会、婦人会等で知り合い、それ以来一緒に活動してきた人が多く、民生委員を経験している人たちもいる。

少し前に大病を患ったが、仲間から「まあおいでよ」と誘われ、活動に復帰した人もいる。今では、とても病気をしたとは思えないほど元氣だ。

皆さんは時折、食事をしている人たちと楽しく会話しながら、一段落すると大きなテーブルを囲み、おしゃべりに花が咲く。関西の女性たちが集まると、実ににぎやかで笑いが絶えない。

「生まれたときから漫才やね」と冗談を飛ばす松本さんは、



みんな食堂でたくさんの食事を準備する女性たち

「私は商売人の家庭に育ちましたし、みんなとワイワイやるのが好きで、普通に生活しているだけ。婦人会の頃から地域に育ててもらって今でも頑張れるのは、本当にありがたいことです」とあっさりしているが、元氣がない人や異変にすぐ

気づき、声をかけるのはすごい、と皆さん口をそろえる。そして、何かするときはみんなで話し合い、賛否が分かれたときは、「1回やってみよ!」「うまいかんかったら修正したらええやん」ということになるそうだ。

必要があれば自宅を訪問し、専門職にもつなぐ「はなぞの」の取り組みは、地域包括支援センターや学校はもちろんなること、商店や病院、銀行なども巻

き込んで行われているため、地域全体に浸透している。そのため病院の医師から「認知症の兆候がある人にそちらを紹介したので、よろしく」と依頼が入ることもある。そして、来る人は認知症でもそうでなくても「特別扱いしたらあかん」と松本さんは言う。

☆^リ☆^ム☆⁺ 誰も悲しい思いをしないように

「はなぞの」は、1991年設立。明石市では当時、各地区で小地域助け合いネットワークが立ち上げられることになり、婦人会などで意欲的に活動していた松本さんに声がかかり、立ち上げられた。あるボランティアメンバーの女性は「活動が一気に加速したのは、95年の阪神・淡路大震災からとちゃうかなあ」と振り返る。

「はなぞの」は、地元のまちづくり協議会などと連携して、毎年1月17日午前5時46分に「未来に継ぐ志」という追悼行事（キャンドルイベント）を開



「はなぞの」の皆さん

催している。会場は「はなぞの広場」。震災当時、この広場には約50戸の仮設住宅が建設され、他地域から多くの被災者が入居してきた。松本さんから「はなぞの」のメンバーは、そこで炊き出しをしながら1軒1軒に声をかけ、生活の支援もした。

「このへんは被害が少ないほうでした

から、お手伝いするのが当たり前やと思いました。それより、炊き出しのために5代になって運転免許を取るほうがよっぽど苦労したわ（笑）」と松本さん。

永坂さんは当時を振り返り、「松本さんはそう言いますが、『はなぞの』の皆さんはおそらくトイレの汚物処理まで担っていたと思います。でも、そんな皆さんの支援や声かけによって、『死にたい』と訴えていた被災者の方々が笑顔を取り戻しました。その経験が皆さんの結束力を強めたし、あったか訪問など一人ひとりを気にかけて『誰も悲しい思いをしないように』という現在の活動の原点になっている」と教えてくれた。

「今後は、若い人たちと有償ボランティアの仕組みなどでつながっていったら」と抱負を語る松本さん。被災地だけでなく、^レ思い^レを胸にみんなで行いワイつながっていければ素晴らしい。

\\いきいき わくわく\\

子どもと一緒に 地域で輝こう



駄菓子屋×子どもの居場所 大学生がつなぐ、 子ども・地域・多様性

駄菓子屋 irodori (東京都足立区)

「駄菓子屋×子どもの居場所」をコンセプトに大学生が運営する「駄菓子屋 irodori」。東京都足立区の商店街に位置し、子どもたちが安心して放課後を過ごせる場として地域に根付いています。学生スタッフの活動への思い、来る人たちの声を取材しました。

(取材・文／長島 ともこ)

●「外国より目の前の日本」 学生チームがプロジェクト始動

東武スカイツリーライン梅島駅・西新井駅から徒歩で約10分。商店街の一角に佇む「駄菓子屋 irodori」。店頭には昔懐かしい駄菓子がい

所もある。

それとは別に、店の奥にはフリースペースがあり、テーブル、おもちゃ、漫画、ボードゲームなどが置かれ、子どもたちはここで学生スタッフと遊んだり、宿題をしたりと思いいの時間を過ごすことができる。駄菓子を買わなくても利用OKで、保護者や中高生なども出入りする、子どもを



駄菓子屋irodori

真ん中とした人々の居場所・交流の場となっていく。

「ここは、子どもたちが放課後、塾や習い事など、ある意味『やらされる』場所ではなく、自分の意思で来たいときに来られます。『話を聞いてくれる人が身近にいる』という安心感が得られたり、日頃の悩みから自然に解放される場所で、大学生であれば、子どもたちは親や先生に言えないことも相談できるかもしれませんし、さまざまな大人の中で子どもたちを見守れる場所を目指しています」と話すのは、irrodoriを立ち上げた一人・飯村俊祐さん（大学4年生）だ。

飯村さんは、もともと発展途上国の貧困問題に興味があり、大学では国際政治経済学部を選んだが、「外国より目の前の日本」と、国内の子どもへの貧困問題にも関心を寄せるようになった。大学1年の夏、足立区内を中心に学童保育の運営、小学生の放課後に関する調査研究を行う「NPO法人Chance For All」（以下、CFA）の存在をインターネットで知り、インターンに参加。

加。そこで代表理事の中山勇魚いさなさんと出会い、「生まれ育った家庭や環境でその後の人生が左右されない社会の実現」というCFAの理念に共感。同時期にCFAにボランティアとして参加していた大学生4人と共に、2020年冬、子どもたちの第3の居場所づくりのプロジェクトを「CFA学生チーム」としてスタートさせた。

● 親しみやすい「駄菓子屋」を拠点に

「子どもたちが気軽に足を運べる」「いつでも誰でも訪れることができる」「地域の大人と一緒に見守ることができる」。この3つを核にどんな居場所をつくるか検討を重ねた結果、子ども食堂のように福祉色が前面に出ず、親しみやすく、かつ仕入れが比較的容易な駄菓子屋のスタイルを選んだ。スタッフは、ボランティア募集サイトで募ったが、「手伝っ



店の奥にあるフリースペース。
子どもたちはどうやって過ごしても自由

子どもたちにとって、より居心地の良い場所に設置した「おねがいBOX」。置いてほしい駄菓子のリクエストなどが入ってくる



てみたい」と遠方から通う学生もおり、今年7月現在、大学生・高校生合わせて約60人。土日も含めて毎日開けていて誰かしらスタッフがおり、子どもたちや地域の人を迎え入れている。

開業資金は、クラウドファンディングで400万円以上集まった。商店街の中心部で、偶然にもCFA本部の近くにある元餃子店の物件と運良く出会い、日によって20〜60人ほどが訪れる。名前の「irrodori」には、「さまざまな子どもや大人が集まることで、いくつもの色が混ざり合って新しい色が生まれるような場所にしたい」という思いが込められているという。

● いろんな子が入れ代わり立ち代わり

取材に訪れたのは、7月のとある日。

放課後の時間帯になると、子ども一人で、あるいは友だち同士で、次々とirrodoriを訪れる。お小遣いで数個の駄菓子を買った後、学生スタッフとトランプで遊ぶ小学2年生の男の子は、「毎日来ているよ」という。家の人が共働きて学童保育にも行っていないため、正にこの子にとっての居場所となっているようだ。5年生の女の子は、フィリピンから転校してきた友だちと2人でやってきた。片言の日本語で話す女の子にやさしく対応するスタッフ。駄菓子は、2人で近くの公園で食べるという。

夕方の時間帯になると、奥のフリースペースで過ごす子どもたちが増えてきた。3年生の女の子は、学生スタッフと将棋ゲームで真剣勝負。「ここは、いつ来ても楽しいところ」と話してくれた。年長の男の子を連れてやってきた外国籍のお父さんは、「ここに遊びに来ている小学生と話していたら、来年息子が入学予定の小学校の子だと分かりました。このような形で地域につながりができて安心です」という。

商店街では、隣に住む大家さんが「今日は暑いねえ」と、irodorriの前で打ち水をしながら子どもたちの様子を見守る。近くのCFA本部のスタッフも、学童帰りの子どもたちと一緒に店に寄り、「また明日ね!」と、声をかける。

● irodorriのこれから

「子どもたちに『irodorriはどんな場所?』と聞いたとき、『大好きな場所!』『ここにいて幸せ!』という言葉がたくさん返ってきて、とてもうれしかったですね。自分たちがやっていることには意味があるんだ、と実感できました」と話すのは、伊久美佑花さん(大



伊久美さん



飯村さん

学2年生)。来春、大学を卒業する飯村さんに続き、次期リーダーとして新体制を構築している最中だという。

「CFAの理念に共感してスタッフになって以来、『自分ができることは何か』を常に

考えながら運営に携わってきました。課題だった駄菓子子の仕入れの仕組みづくりができ、安定して商品が回るようになるなど少しずつ改善が見られます。今後は、メンバーの『こんなことをやってみたい』という声をうまく拾いながら、一人ひとりが楽しみながら活動できるように、お互い感謝の気持ちを忘れず仲間意識をつくり上げていきたいですね」

今年7月のCFA学生チームの夏祭りには3日間で2000人以上が来場。焼きそばやかき氷、綿菓子等の無料配布を行い、貧困の子でも誰でも楽しめる企画にした。また、子どもたちが商店街を回りながら謎を解いていく「商店街謎解き企画」では、商店街から寄付されたジュースを景品とした。地域に溶け込む駄菓子屋irodorri。子どもたちの心を解きほぐすだけでなく、今後も「困りごと相談の入り口」となるような場所を目指していく。



夏祭りでも活躍した
大学生ボランティア

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごとと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、農園での収穫物を通じた高齢者見守りと異世代の交流、畑作業を通じた新しいコミュニティ形成、買い物支援活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

茨城県つくば市

農園を交流拠点に高齢者見守り 子どもや大学生とのつながりも

白馬 孝子

助成金額 4万4000円

白馬孝子さんはこれまでも長年、電話相談員や地域ふれあい相談員等を歴任。住んでいるあしび野地区の高齢化率は約59%と高く、一人暮らし高齢者も多くいます。コロナ

禍となったこともあり、今後ひきこもりの人が増えることを危惧していました。

そんなとき、地区の多目的広場の農園が貸し出されることを知り、本基金に応募。散歩がてら、花や野菜を育て収穫を喜び、ベンチを置いて「語り場」として活用しようという計画で、助成金は農作業用具、種苗、肥料等の購入に充てていただきました。

始めてみると、同じ時間帯に会う人の顔ぶれがいつも同じ状態になったため、「本当に支援が必要な人」との考えから、しばらく見かけない人に、地域のサークルの人た

ちと協力して畑で収穫した野菜を届けて見守る取り組みも始めました。

自治会広報に活動報告を掲載したり、地区内の掲示板で周知を図ったところ、活動を手伝ってくれる人や用具を持ってきてくれる人なども出てきました。また、高齢者だけでなく、子どもに土に触れる体験をさせたいという親子や祖母と孫などが畑に来たり、筑波大学の学生12名が収穫を手伝い、高齢者宅に野菜を届ける交流にも広がりました。野菜を届けることで高齢者に直接会い、会話をするうちに、生活や健康のことなどで相談を受け、介護保険の申請につなげたこともあったとのこと。

地区担当の第2層SCもこの活動に期待しており、協力していくということです。

農園
オープン時
の様子



奈良県奈良市

畑作業から新しいコミュニティ形成 防災にも役立つ助け合いづくり

西大寺北地区自主防災防犯会

助成金額 15万円

西大寺北地区自主防災防犯会は2007年設立。地域で各種団体と協力して、住民の防災意識の向上だけでなく、高齢者、健常者、障がい者それぞれが互いを理解して協力し合える関係づくりを推進してきました。

コロナ禍の影響もあって人と接する機会が減り、軽度の認知症から症状が進んだ、足腰の機能が低下したという高齢者が見られることから、新しいコミュニティを形成して、個々が負担を感じることなく人や地域と接することができる畑作業を考えました。

本基金の助成金は、畑作業用器具類や消耗品等の購入、ボランティア保険料等に活用していただきました。

この活動に共感した人から畑を提供してもらい、月1回集いの日を設定し、自治会を通じて広報して活動を開始。作業には障がいのある人も参加して高齢者と一緒に汗を流し、草花を見ながらの会話を通じてそれぞれの事情を知る

きつかけになりました。また、高齢者と子どもたちが一緒になって植え付け作業をしたほか、植え付けた植物を通じて防災十環境教育プログラムとして、小学校で子どもたちへの学習会を行ったそうです。

「畑」をツールとしたことで、「畑作業という同じことを協力して行うことで、教え合いながら人同士が関わり、自然とコミュニティが形成される」などの効果があったそうです。「それぞれの立場でできることを行い、できたことで楽しさや達成感を感じられる。それが防災でも役立ち、垣根を越えた助け合いを築くことができる」と報告を寄せてくださいました。

東京都武蔵村山市

ニーズに応え、お互い様の精神で 買い物支援活動を開始

買い物支援「しおん」

助成金額 15万円

買い物弱者が全国的に増加する現在、武蔵村山市中原地区でも高齢者が増えている現状を踏まえ、地区と第2層S Cが連携してアンケートを実施しました。その結果、「買

い物支援を利用したいか」の質問に回答者の3割に当たる71名が「利用したい」と回答。「困ったときはお互い様、住民同士で助け合いたい」という想いの住民有志で検討し、「しおん」を立ち上げました。支援内容は、市内店舗での買い物付き添い、持ち運び、会員の自家用車で利用者宅への往復送迎です。

本基金の助成金は、車用マグネットシート、携帯電話、プリンターとインク等の購入や通信費に活用していただきました。

同地区の住民で概ね65歳以上の事前登録者を対象として昨年6月から活動を開始し、今年3月までで122件の実施となりました。そして、当初は地域限定としていたものの、困っている人は市内の他の地区にもたくさんいることが分かったため、希望する人には応えられるように活動しているとのこと。今後は一緒に活動してくれる会員も増やしていきたい、ということです。



会員の自家用車に団体名のマグネットシートを貼って活動

「地域助け合い基金」 状況のご報告

「小さな活動ですが、皆様に喜ばれて、元気になっていく姿を見ることが出来ます。少しでもお役に立てることがあ

れば、お声をかけていただきたい」と報告をいただきました。

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。

8月15日までの状況をご報告いたします。

(8月15日 当財団ホームページ開示時点)

◎寄付受付額

219件

3190万6836円

このほかに当財団より1億4000万円を供出

◎助成実行額

993件

1億5559万4034円

地域助け合い基金は、地域共生社会の実現を目指し、助け合い活動のスタート・継続を支援しています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願ひ申し上げます。
(事務局長・内田)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、
およびクレジットカード決済は、
QRコードもご利用
ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

老いの暮らしを創る

トレーニング、開始

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

数カ月前、ボディースーツを新しくしました。ボディースーツというのは胸からウエスト、そして腰まで繋がっている女性用の補正下着です。あんなキツイものでもないという人もいますが、私は大人になってからずっと使用しています。今回、何の疑いもなくこれまでと同じサイズを求めました。いざ着用。息を殺し必死でお腹をひっこめ、なおかつはみ出しそうなお肉をあちこち寄せては突っ込みしても、なかなかすんなりとはいきません。やっこの思いで身につけたものの、まともに息もできない有り様です。


自分の体型の変化には、とうの昔に気づい

ていました。パンツもスカートもウエストはきつく、一方でパンツの裾は引きずるようになり、裾上げする始末。つまり横幅は広がる一方なのに背丈は縮む。何とも不格好な体型になってきたのです。当然と言えば当然。基礎代謝が落ちてきているだけでなく、股関節の手術をしてから移動は車頼みの事が多く、常に運動不足でしたから。かといって、汗水たらしてフーフー言いながらトレーニングするなんて真っ平御免という、生来のものぐさです。しかしいくらずぼらな私でもこのままほっておいたらどれほど無様になるのかと、これまでにない危機感に襲われました。幸い、施設内にはトレーニングルームがあります。嘆



いてばかりいないでとにかく腰を上げようと、友人共々誘い合ってトレナーニングすることにしました。

約束した日の朝、何だか億劫だなと思いつつ友人の部屋に電話すると「私、今起きたばかり」と気が乗らない返事。「どうする? じゃ、今日は止めようか」と、初日から挫折です。こんな時、頑張らなきゃダメよなど、やたらガンバリズムを突きつけられると、それだけでめてしまえますが、ゆるゆるでいいじゃないという友人がいたお蔭で、一歩を踏み出すことができました。



私は運動が嫌いというわけではなく、ただ目標を達成するために地道にコツコツ積み上げて頑張るといことが苦手、というより大嫌いで、何事もいい加減な性分なのです。昔、我が家の日めくりカレンダーに「達成より難しいのが継続」と書かれてあったのが、今でも記憶

に残っています。

まずはトレナーナーさんに、自分はどうかという希望を話し、メニューを考えてもらいました。マシーンや自転車漕ぎ、ルームランナー等を組み合わせ、じんわり汗をかく程度。無理せず自分のペースでいいのですよというトレナーナーさんの言葉も嬉しい限り。その上一般的なジムと違って、施設のトレナーニングルームには、杖をついたりシルバークーを押ししたりという人も通ってきます。その人たちの真剣で前向きな姿勢にも励まされま

す。

高齢者は元気であるだけで、社会貢献。元氣な高齢者が多ければ人手もお金も、不本意ながら支援が必要となった人たちに費やすことができます。健康で長生きを目指して、というよりは、ボディースーツが着られるようになることを願って、ゆるゆるですがトレナーニング(もどき)に励んでいます。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

ジェンダーの
視点から
人生
100年時代を
生き抜く知恵 13

マイナンバーカード騒動

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規出版）、など多数。

◆ ◆
マイナンバーカードをめぐるトラブルはいっこうに収まりそうにない。コンビニで操作したところ、他人の住民票が出てきた。他人の銀行口座に紐づけされてしまった。医療情報が流出した、などの枚挙にいとまがない。公金受け取りのための銀行口座が、家族名義になっていたケースが13万件にのぼる。これまでの日本の行政サービスは世帯単位で、児童手当やコロナ給付金は、世帯主の口座に振り込まれてきた。そもそも乳幼児が銀行口座を持っているはずがない。親の口座に紐づ

けるのは当たり前ではなからうか。

長い間、私はマイナンバーとマイナンバーカードがまったく別物であることを理解していなかった。霞が関の役人からは、「ナンバーで管理する諸外国では、詐欺やなりすましなどの悪用が多い。写真付きのカードに埋め込まれたICチップで情報を管理する日本のシステムは大変に優れたものがある」と胸を張って説明された。落とした場合の不安を伝えると、暗証番号がなければ使えないから大丈夫とのこと。だがカードには、住所、氏名、

生年月日が明記されている。これらを暗証番号に利用している人が多いので、類推することは難しくはない。

北欧諸国では、生まれたときに与えられる番号が生涯付いて回り、教育、医療、福祉、年金、そして兵役まで、すべてこの番号で管理される。以前、日本に暮らすフィンランド女性に、何もかも政府に把握されるのは嫌じゃないかと尋ねたところ、「まったく嫌ではない。番号を持つのは、むしろ誇らしいことだ」と言われて驚いたことがある。

昔から、お上は常に庶民をだまし搾取すると思いついでいる日本人には、とうてい信じがたい話だ。北欧の人は、政府が国民にとって不利益になるようなことをするはずがないと信じているのだろう。それほど政府が信頼されていることを、つくづく羨ましく思ったものである。

そもそもマイナンバーは、社会保障と税の一体改革のために構想されたものであり、社会保障、

税、そして災害対策のためだけに使われるはずであった。ところが、だんだんその対象を拡大し、健康保険証、運転免許証、各種国家資格まで含まれることになり、挙句の果てに自治体が独自に行うサービスにまで利用できることになった。利用先が増えるほど、情報流出の危険性は高まる。

取得して5年目に、住まいのある自治体から確認に来るようになるとの通知があった。行ってみたら、暗証番号をすっかり忘れていた。そこで新たに入れ直すことになった。マイナンバーカードは、自分でカードや暗証番号を管理できない人にとっては、きわめて不親切な制度である。

10年目には、カードを更新しなければならぬ。新たなカードの発行や読み取り機の更新のためには、かなりの人手と費用を要することになる。それで儲ける人もいるだろうが、多くの人にとっては迷惑な話だ。何のため、そして誰のためのマイナンバーカードなのか、今一度立ち止まって考え直してほしい。

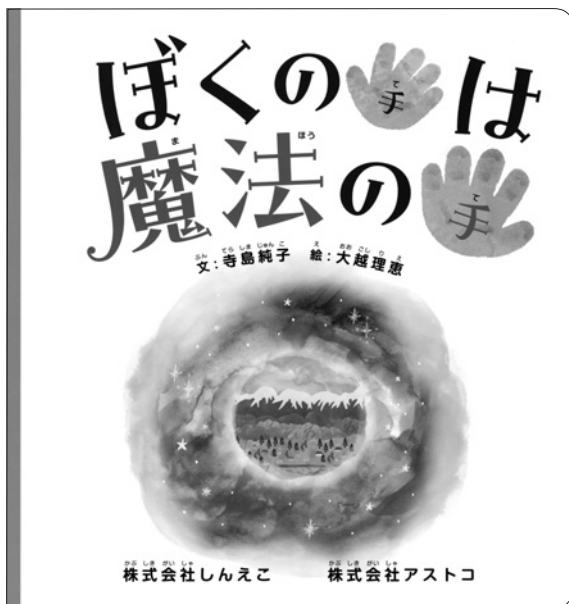


ぼくの手は魔法の手

いらないものなんてない。いらない人なんていない。
みんな、それぞれに できること、できないことがある。

障がいのある「ぼく」と仲間たちが、地域の「いらなくなったモノ」からいろんな素材を取り出して、もう一度生まれ変わらせている、普通だけど、すごいお話。

長野県松本市で障がい者の就業や地域生活等を支援している「株式会社アストコ」と、アストコの利用者や地域の障がい者を社員として雇用し、貴重な戦力としている「株式会社しんえこ」が制作した絵本。しんえこの売り上げの一部は地域に還元され、資源や雇用が循環しています。



皆に役割があり、
地域に貢献している
ことが真っ直ぐに伝
わってくるストーリ
ーです。



文：寺島 純子
絵：大越 理恵
株式会社しんえこ
株式会社アストコ
1,100円（本体1,000円）

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

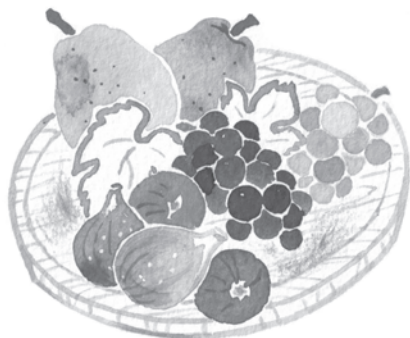
さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **さわやか活動日記（抄）**



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2023年7月1日〜7月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合があります。ご了承ください。

さわやかパートナー個人 (64件)

(都道府県別50音順)

北海道	増玉県	井上 由美	佐久間 博	愛知県	村松 章子
加賀谷 之治	川添 能夫	大島 桂子	藤田 和弘	大秋 恵子	山口県
岩手県	佐伯 正孝	長田 延満	吉田 憲正	木下 敬一	池本 君子
上関 優	佐藤 清勝	加藤 洋一	新潟県	中井 恵美子	愛媛県
宮城県	為ヶ谷 喜一郎	黒瀬 義郎	長谷部 義子	新澤 宏	高橋 敦
菅原 宏之	三奈木 喜逸	千葉 春彦	長野県	森 光廣	高知県
福島県	千葉県	寺尾 徹	竜野 泰一	山田 勉	三谷 英子
三浦 彰	加藤 照見	人見 敏郎	岐阜県	京都府	佐賀県
栃木県	杉本 類子	本多 則恵	河合 俊宏	奥谷 和隆	江口 陽介
橋本 玲子	関川 和歌子	森脇 亜人	坂口 正恭	大阪府	大分県
正岡 太郎	白田 誠	山本 孝幸	静岡県	芦原 久子	杉森 哲
群馬県	森川 和子	渡部 正和	榛葉 さよ子	山浦 まき子	沖縄県
井上 謙一	東京都	神奈川県	鈴木 明与	兵庫県	仲間 勝弘
木村 隆彦	石原 順一	岡添 ナオ子	高部 宗夫	佐野 正明	
			田中 昭彦	名倉 啓恵	
			平田 厚	岡山県	
				神田 典治	

さわやかパートナー法人 (7件)

(50音順)

株式会社公文教育研究会
JCRファーマ株式会社
医療法人財団俊陽会古川病院
有限会社ディーアンドイー
認定NPO法人東葛市民後見人の会
株式会社東京映画社
日本製鉄株式会社

一般ご寄付 (1件)

(50音順)

藤本 裕一郎 (3万円)

さわやか活動日記(抄)

地域支援事業の活動報告は、このページのほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCII生活支援コーディネーター

column

想いある住民を集めた第2層協議体で、住民パワーを推進力に！

■石川県羽咋市(邑知地区・富永地区) ■担当 共生社会推進リーダー 高橋 望

「みんなで助け合いのある羽咋市をつくりましょう！」

そう呼びかけたのは、堀田力さわか福祉財団前会長。2018年3月26日に開催された市民フォーラムでのことだ。集まった市民はキラキラした目で何度もうなずいていた。

このフォーラムをきっかけに羽咋市では、概ね公民館区を圏域とした第2層協

議体の編成をスタートさせた。地域を良くしたいという想いの住民で協議体を構成するため、まずは協議体準備会を開催し、協議体参加の意思表示をした住民で構成する進め方とした。

「なぜ今、助け合いが必要なのか」から丁寧な話を始めるため、協議体準備会は1地区につき3〜4回で構成されている。それぞれの

地区の特性、状況に合わせて実施してきており、同年6月27日には邑知地区、翌28日には富永地区での第1回の協議体準備会(支えあいを考える会)がスタートした。この2地区以外に、すでに8圏域で第2層協議会が発足していたが、途中、コロナによる一時休止や、集まった住民の意見が合わず分散するなど、さまざま

なことを経験しながら現在を迎えている。

SCは、第1層、第2層とも市社会福祉協議会の職員が担っている。協議体準備会の内容や協議体の運営方法は一律ではなく、担当SCが地域の状況に応じて、最も効果的だと思いう進め方で組み立てている。例えば邑知地区の第1回では質疑応答・意見交換の時間を多く取り、住民自身が今考えていることを共有するようになっている。一方、富永地区では「助け合い体験ゲー

ム」も織り交ぜながら、「助け合うことの楽しさなどを実感する」ことを第一歩としている。これは、男性が前に出ることの多い邑知地区と、活発な女性が多い富永地区の特色に対応したもので、実際の協議体準備会の参加者も、2地区での男女比は逆となっていた。

続く第2回支えあいを考える会（7月25・26日開催）でも、それぞれに合ったプログラムとすることです。

れも温度感の高い会を継続してきている。

発足した協議体は、それでもすぐには目に見える成果が出なかったり、時には紆余曲折して時間がかかりながらも、今では居場所や買い物支援、有償での日常生活支援など、住民が求める活動が生まれてきている。市が目指す「支え合い 安心して暮らし続けるまち 安はくい」は、すぐそこまで来ているように思う。

協議体準備会（支えあいを考える会）の様子



男性参加者が多い
邑知地区

女性参加者が多い
富永地区

各地・各事業の取り組みをご紹介します

■ 神奈川県と山梨県のSC・自治体担当者を対象に 現場視察&情報交換会ツアー

県内のSCと自治体担当者を対象とした「現場視察

&情報交換会ツアー」を山梨県と神奈川県で実施した。

現場を視察して助け合いの理解を深めることと、SCらのネットワークづくりを目的として当財団が企画し、県に周知等で協力いただいた。

■ 山梨県

（7月11日）山梨県のSC

と自治体担当者を対象とした「現場視察&情報交換会

各県の報告は以下の通り。



「あえるもん」視察の様子

ツアー in 静岡」が開催され、15名が参加。財団からは鶴山と大方、山梨県のさわやかインストラクター、塚田好子氏と長谷川すみ江氏が同行した。視察先は、

静岡県袋井市の「高南こうなんの居場所あえるもん」。

あえるもん代表の丸岡孝太郎氏と、前代表で財団評議員の稲葉ゆり子氏より、これまでの経緯や日々の運営の様子について写真を交えて説明があった。あえるもんは、高齢化が進む高南地区のこれからの課題を何度も話し合う中で、「異世代がつながることで解決できることがあるのでは」と立ち上げられ、共生型常設型で週5日開催している。稲葉氏から「歩いて行ける範囲に居場所が必要」と話があった。

事前の参加者アンケートの質問で多く上がっていた、立ち上げの背景や資金については、稲葉氏が過去に運

営していた居場所の経験から、居場所が必要とされる確信があったこと。そして、自治会内で説明会を開いたり回覧で情報を発信し、地域に理解者を増やす工夫をすることで寄付や出資金が集まった。出資金は2年で返せたという。ランチの食材の多くは、このあたりで採れた野菜や、寄付された食材を使用。ここで使用できる地域通貨「あえる」や、助け合う関係を広げる多様な工夫についても説明があった。

「週1回や月1回開くと、準備をしようと思えば、毎日開くほうが楽」「居場所があることで、何よりスタッフ同士の楽しい関係が強くなったことも良い点」

などと稲葉氏が話し、参加者の刺激になったようだ。

情報交換会は、往復のバスの中で実施。事前に参加者から質問を取り、参加者同士で多様な取り組みを共有した。住民主体での地域づくりを進める難しさについて、住民勉強会等を通してやる気のある住民を見つけてやることや、対話を重ねて住民の心が動くのを待つ姿勢も大事であるとの意見が出た。また、居場所づくりや実際の助け合い活動につながる難しさについては、それぞれの地域性に合わせて進めることや、住民同士が顔見知りになることで進む場合があるなど、さまざまな情報を交換した。

後日、参加者から提出さ

れたアンケートでも「刺激を受けた」との声が多く、参加者同士のつながりもでき、今後の活動に生かされる良い機会としてもらえたようである。

(鶴山 芳子、大方 彩友美)

■神奈川県

〔7月26日〕 神奈川県のSCと自治体担当者を対象とした「現場視察&情報交換会ツアー」が開催され、10名が参加。財団の丹直秀理事と大方、県高齢福祉課の加藤奈津子氏が同行した。視察先は、横浜市戸塚区の「ふらっとステーション・ドリーム」と「ふらっとステーション・とつか」。これら2つの居場所を立ち上げ、さわやかインスタラ



「ふらっとステーション・ドリーム」視察の様子

ターでもある島津禮子氏に案内役をお願いした。

公共交通機関を利用して訪問し、午前はドリームハウス敷地内のふらっとステーション・ドリームで、島

津氏より居場所の成り立ちの経緯や、これまでの活動、住民同士でどう力を合わせて運営してきたのかについて説明があった。

午後は、ふらっとステーション・とつかを視察。市の土地が売却されマンションが建設される際に、建物内に地域の交流拠点となる場所を設けることを、市が売却の条件としていたことから生まれた居場所である。島津氏と代表の吉田篤子氏が参加者からの質疑に答えた。

参加者から、ボランティアアスタップの確保について質問があり、居場所に限らず多様なイベントで出会ったやる気のありそうな人を

引き込んでいると回答があった。居場所立ち上げ前の勉強会でのように人を集めたのか、という質問には、自治会報の掲載や口コミを活用したと回答があった。

予定していた情報交換会（ワークショップ）は時間の関係で見送りとなったが、参加者のアンケートからは、今後の業務や活動への前向きなコメントが多く見られた。（大方 彩友美）



情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

地域づくり加速化事業

第1回運営委員会に出席

〔7月4日〕 厚生労働省「令和5年度地域づくり加

速化事業」の第1回運営委員会（親会議）が開催され、当財団から鶴山が委員として出席。厚労省の開会あいさつ、委員の自己紹介に続き、令和5年度の取り組みについて議論が行われた。

議題は、（1）地域づくり加速化事業について（事業の全体概要、スケジュール、伴走的支援の実施、アドバイザーミーティング、ブロック別研修・全国研修）、（2）支援先市町村選定及び担当アドバイザーについて、（支援市町村について、担当アドバイザーについて）。

財団からは、昨年度本事業のアドバイザーとして関わった立場から、「地域づくりは住民が主役であり、行政や関係者で決めたこと

を伝えるのではなく、最初から関係する住民が入ったほうがよいのではないか」「赤ちゃんから高齢者まで、障がいの有無にかかわらず外国人も含めて多様な人たちが暮らすのが地域で、働きかけはすべての人を意識する必要がある。さまざまなたちが参加し関わることで、高齢者への効果が生まれる」「主体である市町村がアドバイザーをはじめとする支援をきっかけに

「自分事」として捉え、参加者みんなで意見を出し合い決定して進めていくプロセスが大切」などの発言を行った。

委員には、昨年度アドバイザーとして関わった人や伴走支援を受けた人などもあり、総合事業をツールとした地域づくり、地域包括ケアの推進に向けてより良い支援となるよう活発な意見交換が行われた。

（鶴山 芳子）

第1回 かながわ協働推進協議会

協働型社会の構築に向け議論

〔7月21日〕神奈川県「第1回 かながわ協働推進協議会」が開催され、構成員として当財団から鶴山

が出席した。産業能率大学経営学部教授の中島智人氏を座長に、ボランティア団体等を中核とした協働型社

会の構築に向けた取り組みを進めていくための重要な課題について、多様な主体が対等な立場で協議することを目的として行われた。

構成員はほかに、県内の大学やまちづくりを推進する認定NPO法人や中間支援団体、県社会福祉協議会、大学生など計15名。

令和4年度第2回協議会の振り返りの後、「ボランティア団体」のSDGs活用による企業等との連携促進について」として、SDGsからうまくつながり、企業やボランティア団体と協働・連携した事例が紹介され、ボランティア団体がSDGsをどのように活用すれば一緒に協働・連携しやすいか、などのアイデアを

自由に出し合った。

さまざまな視点から意見が出される中、財団からは、大企業でない地元の企業も人口減少社会に向けて知恵を出しており、得意分野を生かして建設会社が地域の誰かの目的につながるベンチ作りをした事例を紹介。また、企業の土地や建物を学童保育等さまざまな活動に生かすなど、「地域の役に立つことは必ず事業に返

ってくる」という考えに基づき、地元住民に開かれた取り組みや社会貢献を行っている事例を紹介し、結果的にSDGsにつながる取り組みであることを話した。そうした先駆的な事例について、例えば社員の変化や住民の声などをプロセスと共に発信していくことで、これから取り組みたい企業等の参考になるのでは、と意見を述べた。

事務所 より

●近畿地方の支援を担当している研修生のMさん。
大阪での移動中にバスに乗ったときのこと。乗客が運転手さんに行き先をたずねたりするやり取りが頻繁に行われているのを見て「すごく新鮮でした」とのこと。さすがは人情の町・大阪！地域性はあるとしても、そういうちょっとしたふれあいから、気づきや思いやりが生まれるのかもしれないネ。

自由な雰囲気での協議会で、今後の神奈川県内の協働推進に向けて多様な分野の構

成員による活発な議論が行われた。
(鶴山 芳子)

みんなで、誰もが安心して暮らせる 地域共生社会をつくりましょう



公益財団法人
さわやか福祉財団

みんなの広場



活動の熱量が
伝わってきます

内藤 誠さん

(地域包括支援センター職員)

山口県

「広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から」、興味を持って読んでいます。全国各地の活動が分かり、熱量が伝わってきます。協議体と地域包括支援センター業務の有機的な連携について、取り上げていただけたらと思っています。

とても重要な連携ですね。皆様からもぜひ事例をお待ちしています。



投稿募集

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ皆様の声をお寄せください。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856*

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

*払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から はり絵・池田げんえい

「愁夜」曾爾高原(奈良)

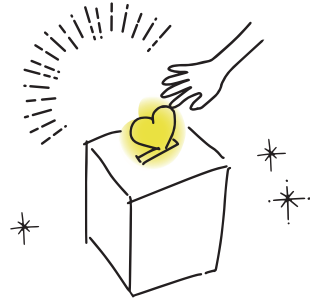


編集後記 ●「活動の現場から」は、東京郊外で仕事をしながら多世代が参加する居場所と助け合いを創出した、若い人たちの思いと活動です(P4~)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」、こちらも若者による取り組み。子どもたちへの優しい眼差しが目に浮かびます(P16~)。●「さわやか書棚」、企業活動でもこういった考え方が主流になるといいですね(P28)。●「いきがい・助け合いサミット」の情報を財団HPで公開しています。オンラインフェスタの前情報として、また今後の活動推進の資料としてご活用ください(裏表紙)。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

井上 卓朗



自販機のプチボラの草分けとして三十年。
当初マスコミには、

「善意の隙間に営業が透けて見える」

と論評され、気まずい思いもしたけれど、

それでも多くの人たちのお役に立てたと思う。

皆様のご協力が続けてきて本当に良かった。

これからも助け合いで繋がりますように。

● ボランティア・ベンダー協会事務局長

ボランティア・ベンダー協会は、自販機を通じて募金を行い、公益団体に寄付する任意団体です。
SDGs活動の一環として参加される企業が増えるよう広めていきたい。

（お楽しみ） 9月号

通巻361号 2023年9月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわか福祉財団
〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©



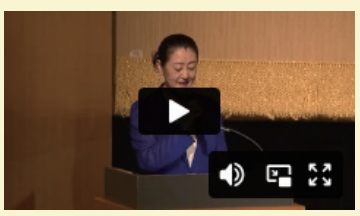
さわやか福祉財団のホームページで 「いきがい・助け合いサミット」の 過去3回の内容が閲覧できます

2019年の大阪、21年の神奈川、22年の東京と3回にわたって開催した「いきがい・助け合いサミット」の動画やポスターなどを、当財団のホームページでご覧いただけます。今後の活動にぜひお役立てください。

財団HPトップページ「ライブラリー」→「いきがい・助け合いサミット」にお進みください

URL <https://www.sawayakazaidan.or.jp/summit/>

大阪サミット



神奈川サミット



東京サミット



いきがい・助け合いサミットの主な内容

- テーマと提言** 全体シンポジウム・分科会のテーマ、登壇者、提言を紹介
- 動画** 全体シンポジウム全編、サミットの模様を紹介した映像
- ポスター展** 全ポスターをカラーで紹介
- 『助け合い大全』** 「パネル編」「ポスター編」「提言編」をダウンロードできます。また、こちらから冊子版の購入もできます。